第五一冊

貴 12
881
45

宮内省図書寮

幻巻

此巻の名は事ノ　此巻ハ光源氏の晩年の事ニ云
大臣とのゝ御ありさまは世の人にみえ給ふの所也
此巻は光源氏の五十一年の所也　此年は源氏五十一歳の時也
正月より十二月迄の事
あらましは光源氏の栄花の事
りゝ　此巻は六条院の無歎なる中ゆゑ
なるよし所々にもさしあらはれたる也　源氏四十八歳の時也
てと年八歳より始る也
此巻の次第は始より終迄
次第にくゝれさるひきうやうにのこ
りなくとゝめられたる人々をとゝめ
源氏の心也　世中に此のえをあらはすれとも源氏の心
のうちにはうれしさはえ入てはかりしらぬとの心也

宮内省図書寮

やうにて人〻くまのうちにあるもとをれとけうこちたなや
まことさちとよもてきうしくこしつうちにのこれり
まうし　年始の清れりくくまうしさ海とうう
或年に度みやとわうう宮八外のんや
きうう宮わうるもはうるにそうくうちもたううしけくそ
いうんしはうんとて　もを源氏乃古道校金の系邪
の事や
清やううこ学はう　源氏より系アムうあくるや
系やとそもまてそ多ひくへまはうひうん
源氏　四を　むまてそやをくあもすーとへまうよんとと
の行はうこもうれりうの四や何ようまのうひうしん
やへきうう宮とまうりうとくあはうれはうしまうある
行とて系行そやとへ云曲とのんうとうう

交うち海くこはくく
系紙とのてきうるうひうくんの代元乃たうやうのやあとくへき
大すむ乃人くん海くへ乃やうにの行ちはを云曲とのんや宮
とれはうしまうひへとうとくしうくにわしもは行
こうそこはうはくそれとの沙とうはうもそは新面へたくく
あはんようしうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはう
こうそこのまうにはのゆこ沙行うはさ海のうとうしうにそ
こまうとはうにカんそやとうはうくやや
重乃宮れあやこうう行梅乃まれなのはうや
乃人行うもそはのうにうをさしてはうしさかうの白へ
ちうう　そのあのゆこうとうはうと源氏のこはや
清あうそひとうくまうのうはうはうはうはうはうはうはう
はうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはうはう

ゑ□さともあしたゆかしくこそまほしくへこえられく悪心ゆゑに
思ひて　此花の比をりあらしもと御格遠なとなこしに悲傷
の時ふられたる御座なれはや
清らうしくみとりこのを給ふは　むら雨里の名ある事とつと
源氏のさきたしわすれ給ふなとや
まよはれなく見まゐるをとなくさめてあれはゆうまつる
源氏より此は木所の宮はうちくてめてたくゆむとなく
人のんや
年はまゐやうに清げんをくそへくなるを色あし清のしりと時くへ
見えるのさぬやうにおほしかるをはつらくくこそたすらくなるさ
ひしき法ひとつ事まし如くへいひと打ほそふかまてなし給て
よ源の清との為ると思ひ　源氏のまこと実みておほさせ女
なまゐれとも打花のうらつまりとも前とへ八宮しりと此之

あらく如給てはたらいよくたまふくもしくし給ふとや
うまこれたあまる紙　源氏のよ原氏清えん源ちうくあま
為れ人をとこ給ふく御物語ともし給ふとや
打まつりわたるを礼ささまて内つらき給ふは思ひてなる
ました御めしへの物語あらし給ふ打うくとあり　河海云遠放
離　引きとりし　花鳥云　清濁の事や
為稀なる紀法をしりとふの中くなるゆくにつまくくと
源氏の好色乱くくへ常く打りしまうさぬとのんや
内しとありところまことにつまりし中ころとのことあり
うれはしたるもしきのはく見く給ふなるをおほしらるに
源氏の二條の宮にうつれとに中は好色ゆくにはらくまん心とは
あさきをやつるるとくやしうこひ給ふ也　或ハ権為東院又
勝月秋又女三宮の言為係へさるあさ給ふて付てなる事とや

ゑいかまことにくこも又まあやくに心くるしきことにつきてめとさ
やうたすらんとみえしなきらん　たゝかれやくハ朱雀院なるを
のゝかまめやうやくハ女三宮わたらせ給ふをとゞめ
あれ事あもわきかくしうれしもしれんとてくへまつりしかん
上﨟しき紫上とも
人のあり心もいとようかくしつゝ給ふかくえんしうらみて給ふ
あとをたすかしうとひとつゝちのことのなとはんとせんとて
ちかはしてあはしのめくもとめとみえ給ふんとゞめ
いとかしうおほし給ふさきむらさきのうへもあはれなる心ちし給ふ
源氏のまへこゑ乃志と紫上のことかくれしを給へことさ
まとにハ女君れも恨みて給ふまへたすらいとも一かさ
つまのハまれほとにらんし給ふとも
その折のれとのうたとあらいさもちかうはゝまゐるへくハやう

のゝしりあひたり　とにかくほとなく人まとハ思ひたるらんに
給ひぬるほとに源氏もやうやう如くし
女三乃宮も此やうにてとしつゝめ給ふ心もし給ひと　女三宮此ほとまた
源氏の心も六条院へ女三宮をすゑ給ひける紫の上の
心をとゝめり
その折ハしもむらさきにおもひくらしたまひさりしかとも衣がへ
まつあちらさまの心をやさしく給へりしを又此あとたゝし
あるにも　しるしまでありしともまゐるへし
雪のふりたるあした暁にたちかへりてひとり見あかしてうへやう
すみかはりこのかたのうきをしてあるにたゞにいとまつし
うちのしつれる袖も此あらはし給へりぬるを
是ハ女三宮六条院へかよひ給ひて三日乃夜の暁に雪の
ふりたるにしたかひ源氏乃女三宮まいるを御覧してそれの御歌

一 ありけんとおもふらんとよそにあけまとふも心さとき人は雪
その雲かとみし事にて源氏の上おほす源氏の心也
うちとけてせめてまゐらせ給へりしほとのうへなるとを
紫上の源氏を恨給ふ紫まとひしなれぬし給ふ袖を
源氏の御ふしまゐらせ給ふるをとおほす也せめて
ものゝ心也
紫上もうち其の御ことを又さりゆるまし上きりのはしめを
ら源
紫上を哀ふかく思給ふよしを又いひなさん
世まりの給ひ給ひなんとく思ふのひとふ人こゝろまし給源
氏の心也
御ほのかなりしに折すて女房たち人しけうしとはまり
するる雪の邦ともみ色を思ひ給へりたくそれ折りれ心ちを
るにうるさくしのさいしきことひゝかれくる雪

またとおほしにをもともとはかり紫の御かれ此如く〳〵女房たちの流
ひとつへ行かて時とのかゝりはゝまたの雪かといひみと源
氏の思ひ給ふまうしく女三宮より御給暁雪れ降し時あ
そうしたる事をのこともと紫の君れ御かのくさ上給
ありつゝも御とも今れさせそしれさひしきさらんくらすれ也
浮世にみえ雪消なんとおもひつゝかひのかゝりおもふとそはと君
源氏心え　行きしなんと思ひつゝやゝ還世し給へれ
との心也みえまとを雪ふりつゝもみさやうにみえおもひつゝ
不思ありて年とゝもとの義也みえん雪れ縁也
引歌 撰
うき世にみえ給へるまなてかきくもりまへと思ひのかゝりもえ不
まひのまよさしうし雲消てもりみえておもふとひ給
熱傷のまよさもえし常にいくこたちひさうし給とと更
いろとひとり

え侍ことたゞ史記にしるしたる史記をまなひしとも　史摘也

名のきたる也

中納言兼中将の君なりと云事を書まへちかくきこゆる物かたりのしるし也

いふまゝに源氏の系しなくかき給ぬ人也

ひとつまにはしはうまれまさにかゝる物のはしかきれかくてこそ

いとようおひをゆるしはへりまなひせさこそかくてもかくひ

たゞかれとうちなけるを給ふ　源氏の詞也

我さへうちもそてをはぬへくれのいとくあけきてきえんとの哀よ

いとおしうて人々さるとみゆるしはへ思ひやりたうちおもふ

ひて読るとよみ給へりけるを　かくなしぬ中納言

中将君なるとのるとよくいひし也　源氏乃隠遁をされ

らもしはたえんとの心なりけるにや

ようもこえん事まてかくに源氏の数まいらせ給

たゞとはりにこゑすなりしとはあるへきにまします事也かと

いふんや　河海云　是をよろし八中宮の義也よりて給らひり

こうんことにくゝるにといふんや　桐壺更衣ありこと

ましかは御袖のうちしめやかにあはぬまてはなり御意見家

人々のこゝろつくさせはらせ也

引哥拾遺

寵を河心乃うちにたゝうちれ八袖の上のしのんでりつきまん

よ給たうとこうんよりは浪のみゝなましてきて女房の心也

此点につきて物へあつをそとさへきるにおさくわるまじうさる

まゐかそむまれあつし　是よりハ源氏乃心也　第る不

満足したるまふる事送とや云る法なとしまれる不足なる

るおもれとや

又人よりさもとくにいたしこき契りなとゆかりのあるとこゝろの

かくし情　源氏乃左遷をたしぬ文籍と女院葵上夕顔る

とのことにはるかにくれたるやも

世のもろもろのことをきくにつけて行くすゑを

なげくしるしにもなりぬべきわざかな

源氏のうへにうめるれば打ひきかづきて伏たる

そばをとりのけんとてうちやるめるをあるとてひきはるも

かくとてのたまひたれば来りしかたきことのうちめをとりて

源氏のうちにくれたるをもくして命ぜられたるかき

しるのうちにはるかにとりのこしたるをとりて

もくせの枝をとりてれんのうへにおきたるをそこにて

やまとだましうん寒のほどなれば

もくせの枝とはなにのもくせとやみん

のきにうつしをき源氏の隠遁の事をとひはべりしかば

つゆしらずとなんいとはるかに行とはなにも

寒ほどくしあけをとはなに安の源氏の四也

こゝにくれかくあるをしるをたにかるをしる

のうへのうちをかけを用るなれ行とのんや月なるもと

をとうり

人くのとにやてゆきわたりもん程にて今一ところのこころ

神のあくれいとをとられしうう　源氏の出あり給りん安

廣ちをとにあるかうんとをもうしぬとあくをとと一人のうへ

やうや

まろうるとおうの心のほどとうれとて行あるをしのこひかくし行り

まうをまいやうてこうりるとの風とのをまうくくまあせた

とうむうるれしてうち行をたりるんうをとくこと

をのくうちうてまわしうれとさをとんやうこ

源氏をんのうとみくはうやうるのあるとの行はうるぬ事と

かくとなり
むさくるしくてやゝねかくのことくおほかりし給ひつる所かれなる也
くらし給ふ御やうすをとの言ひやうなとかく也
女君の人也
これとしる人ならてはほのしらしくとおもふへし
なとてかやうなる物語なとをし給中将の君とそ給つる敷也
またちかくさしむき　源氏のさしたる人ならねとのやうにいふ
といひ給ふ女中納言以下の人也
見給ひたれなしを　中将の君とそ御上乃そこに給
しんとや
いと思ひつゝ給ひもくさはや宵らんいとゝうらうらき
ともにさそはれも心のしたりあるを　源氏の思ひて
たゝみもなからしとやさまとても中将の心ならとらう

いふによりてそのふひなしたりしんとや
いくらをおもくはきこそ外のとにあてはゆるさぬ人へのきこえなと給
うちみ物り　御上の不便にさ給ひし中将の君なれハ
とてあさうれ心やすくあるらかにとふひ給てとうる
まて源氏の色うりもしたとや
むそくの給へるしものをとおほしけるにほそてものほうる
見ゆるもちゐそ折と思ほしたらんをかゝちるとを
めやすくこそ　御上の中将りんをそくの給ぬへし
うちひ松を思ほしくあうらきえひ
荻　刈と色ゝあなすむや此心を唐土ハ塚の上　文選云馬鬣松青
まふ松をあらへあるろとふりな松なれたち墓に
いつもうらなひ松といふ人の形見にその松とみつ
よくよ御上の形見と中将の君を源氏の見給ふく

ろうたきひ松に見えし所と云心なりけるや
河海云
松無抄云大国のならひ人の墓のしるしに小松をうへて
しるしにおりそこ義は文挙律にもまたあるにひとし
くはかしもつくるなる松を馬鬣松と号するは此松
を馬のたちかみになそらへたりさるをひとし
からぬ心也他の上のしるしをもつくしに中務の家也よ
みへるをそたくなしまいらせしは八幡のくしや也けり
つかの中此事俊成卿雖義也と
案之此上中将君のたまひをもちておもはし給はひ
そへられしゆへにうたゝひ松と号すをいふる不知是
あり詞に心をもちいるをとめかたくこゝろはちかひ
松の見えけるひとありとてにんたを又をえひと
いふうたきをそちになしもて文選のうちのひ松の例なるか

やはり当有へくもと　礼記に馬鬣ハ墓の形とかへし
たりきいふの其記に墳のうへに必松をうゑたるにもあれ
まさ其形馬のたちかみに似たれはいふ也或文章男女
文鬣或蛮髪あるをつくりてけるかひとよりあへていまさ
小松のかみは雨の後墳上の松をと云人の形見とみるにやと
くに此中将君此歌上の形見に見えけるや此外無其歌
こと　花鳥云　河海に此事むかしより伝れとあらさく
注要にもみえ不可用へし
文選に馬鬣松とかくうたゝひ松とへよひて伝なり馬鬣ハ
一つにはたちかみのこゝろにもちゐるとにつけてさかの塚を
いふなり主塚の上にまする松をとうるのひまをしは云々とへい
塚の松をと云人の形見とみるかことく中務の君をこそ是上
の形見とみる心也心をもかゝらちるをとめかたく有之

の御かたハ光見ゆる家といふなり
文選句（翠翹云）　中将とは兼の上のかみといふ墳上の松と云人
の形見にならむ心にそふとて人たりとく
たゝみしましきよみ八月くしと物かたれ　たくり思ふ
よりかとの人也
うたれ人めんちゝふ見えし給ふにむかしちからあるとき
ましき文法ちしくつ此宮たちありと常に参り給ふ
きといかんし給ふ中よさしくなる　源氏の傷心の人に
ハ見えし給ふあらし也
人りむかん猶あはれしく思ふ河めん打きめんといふ
とも月ころは須磨にたゝん別れあつまりくるゝしき
秋ことまつらてを思ふの世の人にまてなやまんのち
かれきへらむてあつくへし思ひ出まへのめん

源氏の人ナり對面の間たちろハ涙ふかくまふくしと
ふかくしもいさしき悲傷よ心も消えたる也人に見へし
む事給の名ともはかしきらの源氏の人也
人のもも見えしさん大将殿からこほさんとおもふすちとあれと
世のよ源氏ハ人々にも見えし給ハぬよしをとそうおはしゝん
それより来よさ夜ふけて對面し給ふく見えしうきも
ゆきくてハ物おもしろすあれとも也
猶ととに常のてふかる事とれなくとこたふるとも見えこる
きちとのめに見ゆる文こそれくこまれさるさて打こちう
と物語をいた給の気色とみるに見えをへたてそたるめん
し給ふる　こまてふかることれ　也くゝるものハ見え物と
つまさる 物きも也
かくれうはし給ふるやうに人のうひはまふ人こさこそおもひを

ひのこあてこそと祈んしもくし給つてうきをとも
えうとひきやり給つる　然傷の御ようと出家し
あるとき源氏の内乱たるやうにんとつかれいと芝
とと騒ようもひきなり給つんとこの給ひりえつてまたま
えあるうとも　年ひ　源氏の心平生にうりたるるに
ほうくまきたりとうちのめきなりつきてて
女三宮ひ薬里四月ろ三源氏そまへうくり給あと
ぜんとのうすとこの物給へくさん源のこもくこう給へえわく
つきなりあるも
まりいとせんくさに源の和のこありまきられいとるるか
をていつくうにも妨りうすれたりめくくし給ふ
引ふるとこ表傷部忠岑
つ雲源の名う袖と雲たるまや給と源の和とのこある
こくさんの宮の間りまを給くこの文とそうくし

きたりくさめにをかつまるを給ある　四月中宮
上の御服あるを給へ内裏へ宮もこの文とく源氏の師
あくさくこんくめりたるも源氏四十八果れ付きき
給へとおくし三文ふ果り吸給へるも
それの給ひしるとてこの内のはうへのうとうまそう
しうこあるを給とと月中より給ふ二月よりれも
内本とものりうとにたるもまくしきもこもたりしう給
わるまるに　えいこの宮れ宮上の誉ようり作ようと
あるくをいうりくこ一条院あくをこの文掛石
梅ようとゆつり給ようり宮法をりりたりもとうこ一条
院をゆつり給ようこいこ一条院の事とりたしあるとを来
より不審也一流りの給る物語あもこをを行のそうひの
あるれうとりんゆるにるしくをつりこ一流りこうあるれく

物をしまのもと三条六条院のあるかとをくとをれの梅の梅
をたづねくるやうにの給ふよや対のうへの梅の梅のつまの院
みもあるをにくく幼稚の四よの給つるを又一流よ俊令紫
上の御の御二条院めくり梅のうるをとの給出く
ゆつり給ふ〜の給まてにくこゝ毛あまこ八ハ六条院
の対の御れ梅の梅をゆつり給とのたくゆるしてつて
院ハ二条院をゆつりやうるを　わたくもとめに行給をうり
うるに如給なくもくに行給くに対の御れるの梅と
梅とハ花のわくにくめてまてあるに給へうん
わをはめもを給へを迎りたくしたり給へをと二条
院の梅の梅をゆつり行をと宮にたり而経二条幼稚の御
二条六条院のふふもなる花四りの給との義可紙也仮
人の義り可隠ゑよや

うの方くくれの梅り宮のあるれやうになる花りて大きくを
ちつてあの方給くを
伝海云同方の方業
日給をるの梅〜梅の木ムるをとに四給つくあるをなるを
同六作
ムるくくに袖を沼ちぬるを云人の形見をみをとうををむる
宮れ花やくになをを出くれ花のあるをとをとうををれハ　聲　茅　胡添下
源氏　あるををハ花をを花宮ををくくの形宮
ををを宮ハをくくをとうををハ世にあるくまをを
なる奇如〜
伝海云武蔵抄
同方と
梅のくくにををる宮をを云をを
翠花云
二条院也　仏者をを六条院如〜〜
をを毛ををををくくをを給をくくををくくをを

肖柏なとハ山もとめて詠けるにまあり縁と云の
心なくなるにはきかともむかしより用されたる又かさ
也よの例にやうに　かへし人まさ葉と同心なり見へしつ
ともとハ枯傷の心ゆへにくもまさ山の心とゝめつる猶紙
なと云ふまゝ形見にも添悲をもとめて心こまやかなるさ
色の根にしらへん山のもとにゆかしきのかくしき詠まさるを詠よ
源氏の心より出世の中のやうに色のまにまに山の末桜の
しきに云ひへるにとも
引歌古今
花の色はまた見ぬ奥山のみちのくにまとひとまとしきん
山吹なとの心ちもしてまたたえぬ心あるとも　古今集巻
やよひしたり山吹の羽はひ紛や
うちつきは露華のこと見れさ上詠
なとのさくとう詠ふものへは出あらんと云ひ紛よ　源氏乃心よ山吹
よりて袖の色も家ゆく見られ給ふとも
俤のあるをひとくちまてやへさく花さくらのなをのこして
ものの遅速とかり
うす桜ハいろもなく梅の花をおもひてそ待つるをとも花ハをとめの紙
うす桜　山さくらのとをと云り一々を　八重を　山桜と云を
ありかなへし　河海云　朱桜　和名　樺桜云く
浅緑春のうすきハ淡くめともいはまそあかつくへき桜なれ
またとさくらそ花ものへとまくうるをこくをは淡くしう色を
こゝ詠しう時をと云まハ自ひとくちくるに　第五ものまゝ
遅速とよく分しよく　桂宮詠とも　非引哥自詠り
消え
とさくらに花のいまとさく人ゝにも申せう源氏の如何さらに
わかまのかさ桜ハ咲てかりあるきいつてひとさきにちらしきさのめ

くるゝにつけてもあはれとおもひたる風もえ吹よらし
也　弄花云　三宮事　幼稚の人ハ二条六條云々かるへき
二条院はゆかしき也
しらぬひとなりともひとつの給ひたりしはいとくるしけれとも
花のあはれもまたにしやうをたてまつりてひきよせるといとをしくきゝハ
風も吹よかしと也三宮のたくひ給ふ我身心にかなふと云ハ
給とのふもちやうの宮ハ本宮するとのやうにし給かんとの心
やうひらおもれ
弁くるまの給ぬ　源氏の心さま也
御心ならても此袖をとめさせ給へるをハいとうしろめたく御心しらう
給へりしるを公家あるとを我思てあるひより見るまほしき
つり給ふ
弄花
花宮ま仰せ此袖をも折思はなを風すゝしきかな

公家よめあへるも三宮の仰をかくいひし給也
天下をとれかしん事をものゝくるしかるや　源氏の詞也
三宮乃仰る
命とはふとの心さしもはかなくはへともめんハあはれ
しつかてまての源くる給へきも　源氏の事をとるもいまはせ給
いはれとたまへくへ給ともはへり給
いと神はと仰らる　三宮乃あなるを給とのふ也
心の給へるをとまかくしつの給とて　三宮の詞也
ともさやうにの給へハ又さやうに源氏もの給すとの心也
まかくしつやそのやさらにさるとはいみのやめに
勿てとハ源くるてしをうるとそ　河海云　枉日女紀
禍同
命みるありて源氏も此袖をもてまつるとてまつ紀

十四

らうしおうは　三宮の御方御衣とも申す又源氏乃御衣とも
おもり所ニ随へし
をさめうらんよりしうちとく打まかせの色よりもみをとろうち
をとも見えわくへしあるまめ給ふ　源氏の御事也
女房なとももう此御くそのうすにみぞもあり　出来よりんさ
しかはいつまでは服衣をおもしたゝぬも見ことゝ也うらん
の服ハ一周忌の内をいふとあり
ほんのさたあひなる事もあやなきにてうれやうはなさ給ふとて
服衣をもしぬきて常れなるぬれとすそゝれもやうれや
りたてまつとて人もとるとて也
えりし此御ますをしもいろそよのつぼなれとあとにかしに更に
てむかんをするまえき　源氏も常れ御ありつあれともいい
うはも更にかしまむまんと思し給也云後とハ平絹の上

衣の色をいふとあり　河海云　或人云妻服ハ一年中に一度着之と
六条院葵上の時色よき服の色わかち侍きれてはなせらる今さ戒云とおほえき服の浅
深ハ忌の日を定めてさなるへし　夫妻ハ主君其服を一生忌する今云是ハ又夫婦の道氏
ハ猶婦の服を三年しりて着し夫ある官仕の式ありあし此事
欲切なるによりてなる事給ふ所ある事平服忌令云
本書嫡子中妻之服廿日服一年子不生者妾服廿日忌三月云者ハ妾の色まで三
月服也浅年此あ云ミゝくの御はなち給しれとハこの色ぼなれ
とく見え色あり又家あるも打わくくなハ其の色のやとみえさ
是妻又共衣ハ色服なくしても前官省むも又色なるとて給也は
後も深き申さくを後なく影衣の色服なくして淺文よ
更つて思せらるゝ也とと　むかし云　出来之ハ八月よりくまた給
色も源氏の思ひ妻此服をさしく思しても三ヶ月
なるへしゆかしの年此去とも程云又の内さ衣を忌

[illegible]
[illegible]
西喜[illegible]
三年のゝちはれの[illegible]
朱雀[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひとり

[illegible]

源氏　[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

何たるとみるうれはしくとまれかくまれとこゝろ
はせうしうしうあくにんこゝろもはやきしのこゝろやうある
まゝにはまうさんなくれとあるひはいてゝこゝろうくに思ふくれはこゝ
ろをるもいとうしやまし　女三宮をあはれとおもひたてまつる
うくにうさんはいつる女のにんこゝろをみるにさくもあるるとくちを
しうれはさる　あさひ　源氏の御
をなくなりぬるものとのんや　女三宮　源氏の御
うく　御　あさくさんやも　さて字消ちて何
あうれはなくなくしていとれはいとうくかんあまてて　ちをを橋を
用也文はむとてをはむくるものもあてく
御　時のむとをむくるものもあてく
御　はむうんやこ
まうり四のををうくしんなるくて花うこもををまゝうのこ
んなくさうをはのにうさうりみくくをみるへうりうれとのはて

はをくくははうくはものうこもをくまゝくくれをきんく
はのにうくとみくくはてはくくはくくんとのんや
をくはのまへうは山はくをはうみはくくはは花はをはうくれはをされは
はくさくうるくこ　へ左宮　源氏のはは祖也
六条院　六条院の東殿はをくはくはうくはうくくはくくくはくくくはく

[illegible]
[illegible]
[illegible]

いとをかしうなりぬるを　紫上は御ぐしなどいとうつくしう白ひかりしたるを
時々と何のつくことを一やうにて石ぶくなる事はかりしとも
いとけなきやはりしとおもひ出るに　何ゆゑ石ぶくなる
るれば　と紫上のたまふを源氏のおもひ出るとも
　　紫上のうた
それかとも見えぬ斑雪のうちとけてうちとけしうつくしかりしを
ひさしかるまてなれこしかの人の
をとろかさはるとこそ思ひ出るを
　　源氏の御うた
ちとせをかけ紫上はたちとなるまし
いとゝ新たに夕雪れ顔をとなりうれしとなるまし
やうて四月ぬ花ちるとて行へうしうしてのうれ行
あり　源氏の紫上のことを思ひ出給ふ御ものをへ
　　左京の君の御ものをれんとうきみも

かれはいとなれはりをれいうちやとろうれとうまうをそ
ひしかるてもてつきて　源氏の君ひすくぬれ行ふるよ
あるとの四月ぬ也
行くゑ人ものをまうとをれと見給ふに
四月ぬ乃花橘は女三の宮うりさ所とも
又うさ所ものをわてうまに花ちるゆへうしとも
もてなし給ふうしとおもひ出るに面影よ思
うれしさのこまをれいとあるをもへ心そ
と　源氏の心ひとつをなるうさ所ものをへ
いとなんやうあくはなくてやうれをちさとにとはるを
をそ又一面名ぶるまうをうるはかりしとも女三
宮ものを四月ぬ乃ものをとはるとは紫上のまうさ
るとの也

[illegible]　源氏の心ゆるしなんとうらみる
[illegible]
[illegible]
ゆるしなんとて　若物語[illegible]
人とあなれと心くるしいとうらめしくとうらみ
[illegible]ひとくもくもあれるうらみも
つまは源氏の殿也　源氏のみやとえんいあら
[illegible]
[illegible]
源氏は殿ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゑてあそつてゐるも
ゝてゐひとりもそちれそれ〳〵さのこんきの行ちゆと
源氏乃四り位之の事れく歌行ちれとゝもそきそろ
ゆとにその行ひあさぬとやゆんの中ゑゐるとゝゆゝ
のやうにそちの行すゝ行とや
ゆ〳〵たるさ海のことゝろ心こ行〳〵きをいとわ〳〵うん
なりて　源氏のはきをゆゝこれいとわ〳〵こ行とのんや
たゝこのんめあそ行そろさ羽〳〵をたんこんのゝちれは
ゝ〳〵とのつゝ羽ゆこ行るたゝるをまゝてゆうそゝろや
もくゝと羽ゆゝそん　ゆんこれ羽や宮ゝ乃ゝるゆと
ゝそ乃ゝゐとたゝんこんちは陪くゆゝ宮ゆれ
ゆまゝて源氏ゝとの心や
ゐゝこゐゆゝゐるゆゝうをゝてゝ行〳〵きゆとゝ〳〵さゆ

とゝ乃ちゆゝくゝたゝゝるゝとゝゆたゝゝるゝを　わゆゝ
ゆゝとゐゝさんやゝ乃心ちゝとゝんゐさ元八中〳〵ゝゝし
さにゝゝゝとゝゝ〳〵ゝんのゝれたゝゝゝゝんゆゝゆゝゝ
ゝとゝやゆゝゝ乃羽や
行ゆ〳〵ゝゝ乃ゝにゝゝゝやゝゝにゆゝんや　ゝゝゝゆゝゝ元
源氏ゐ羽乃羽やゐゝゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゆゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たつへきさいやとうさめやたるもとを出ぬるとをり
渋つまて不亨よ給しんやとよそてうるさてさいさるも
或又物狂しるもいつ或ありてうりを給しつを
給るもとと
時ゐよもこいてさを給ふうさ事ゆうしんとうゆしを給うく
こ毒　むるを　始終左心さあひして世中を給とうる心とある
そ一これ心のあり給とうるんやと
山あ一人のうさあ一るとと安給よ法をあとんよおとうを
左ん行こもこんり心くれあるるゆとうう或心ちえよおと
もこもと或をうつんよあの悲傷左心をとうしくもあり
又世よもこうれようるとうんのやうにとうゆしてのうく
と有うき心へようこぬちとこも給て原或もと出ぬ悲傷
の物よ出家し給つ去うこのうの心やとくゆやまし一れへか

左うてへあ一さわさみやとゆんと氏義別し給初也
とうとうとうとうゆ一あうてせとうとうぬ給つそにたんとう
并むを　とうりたうみるうこ
うを法を給ようさ事やそうて給こうゆ一のうあさ分
給て　むるを　とうんようとうを　こ毒　あうしされあまうくを毒
ちとをうは必をうをうこ　ぬ物もあつうやうるれと給く
心都よあうこうしてうんが行こをもうしうこ物つわうも
花山法皇八弘徽殿の女御　よくうもさを給て儀よ
佐をちうむ山りうを給しうこと給あくを安ようん
らを給て花やうれるゆあ　あうまひうとあうしも左心そ
行こうとやもくこさあやを氏物へしこ
あ毒ちうとを行こうまひさを給てまうしこ給こうを氏あうへき
清あうこさ毒り九やもうあうを給りんまてへこうれたくを

[illegible]

ひくやうなるくしき　ゆんめ中ゑのほけ殿つゑたちちと

おくりくゆかつくまゑ宮こつとゑ行とんまてゑ源氏

のゑ出家とたくゑゆうこうたなすゆ古ゑ面りゑゆうらとも

ゑれさをゆうこんゑをゆんつとゑ神ゆうゑゆとゆゆゆ

ゑの行ゑゆ

いとゆゆも　ゆんゑんゆちゑゆ源氏のゑひ行んゆ

さまてゑこひのゑうん心のうゑてゑあゑたりゆゆうゑとゆゆくれか

ゑの行ゑひくゆゆうゑとゆゆゑゑゑ

あるべきことなれども、ものさわがしくあるべきことにあらねば、
やんごとなきうちにもうちとけたるかたにて、
年ごろのうちとけてきたりしかたちにもあらず、
うるはしくなれるかたちにて、
しるしばかりのかたちにて、
きてゐたるとのゐすがたにて、
さしこもりたるかたちにて、
ものいとをかしくうちとけたるかたちにて、
ものいとをかしくうちとけたるかたちにて、
ものいとをかしくうちとけ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

めんとうこと

あるうるこよりわれうよりあるもあるあるこのり
わけ〜たること　ゆんこれ久うきこるとれすれとれ行くハ
ぜこんひさこう行さまこくあ〜たりしとも
たるのさみそめるこんこをとれ〜ふるこうくこうつとき
こんこそこうあのむくを思うり〜行るこ　のうくを
行るまこきゆとたくぜこもゆんこもきひよんこもこう
行て浮中れこうるこ〜やを源氏のこの行くも
うちこのむくを　ゆんこれ久ゆよ中こるとこうこ行
このゆよぜこんとたのこ行こ〜とも
みこうこそこるこんこうこうちこをしゆくありてまてはし
行こりしくこをこてこと人こをこ〜もれ〜こうこ〜ちこうとお
ゆ〜こゆ　ぜこんこもゆんこうこ〜とハこあこ〜

一向こうちこくをこること行りしとある時を驚心〜てを
てこ〜行〜こもくんこをれこ〜こるこ〜やくハぜこんみそ中
よれこと行こひくはきこもこ源氏こをこそこくこと行こ〜れ
こうこと行こ〜こも　むこるこ　ゆんこれ院こうこ〜ろゆをここ
ゆこれこたのこ行こ〜こもこ又一向こうこちこをしくこを
こここ行こりこくこをこてこと　ぜこんこもこの行くはこうこ
こもゆくこ人こハぜこんこの行ゆもこ
ぜこてこうこくこしこ時こをこうゆこうこ大ここくこうこちはのゆよ行こ
行こうくこもあり　こうゆこて源氏こ乱行なる時こをゆこのゆ
うゆハこ〜こたるれゆこりゆこ〜行こゆ
むこ〜こうゆこうこあゆここあこうこもれくこるこりここるこ人〜
ゆんここゆこゆこひゆこ〜こゆこ〜行こるゆこもこ源氏のこここりここ行
ゆこゆ

夏はけうさうの行者うへはさうくまつり給とて

もゝ菱はうるはや菱よりと四月はうるうしめや

菱食はらうるて者ゆうゆ年ゆうゆはるはひもとくこゝやとき

もゝ菱は　ゆうくをゆうさうるとゆうゆはるはのゆるへし

者うゆゆうひもとくもるゆはをゆるとハはゆうしゆや

生上のまゝまさハ更衣の行蜜未はゆるへきに死菱は

ゆうゆうゆるを者れハをゆりつきくゆもゆそゆ出行ゆん

と源氏のゆをくゆゆうるとゆの行やされゆゆりゆゆ

ひとゆをもくもるやゆゆうゆとハをくまゆと

者ゆゆゆゆるはひるにつきく者ゆゆ

ゆゆゆゆのゆゆも立ゆる行をゆるゆはゆまゆき

と云ゆゆとくゆやハをゆとくゆゆゆゆ琴ゆゆゆゆ

うゆやハゆゆ行のゆやゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

生上のゆを衣蜜ゆと衣蜜ゆと調ゆゆゆゆにゆゆゆゆゆ

行ゆゆゆ行ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ハゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆ

胡衣ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

女房ちとくしうこんさとに出て見てゆくゝちと
の給ふ中ねつえれをんうゝゆきてにゝゝゝるとあやと
ありゝゝあり給へて　女房ちと　源氏よりの仕人を
いとさゝやうにかゝゝゝさにはさして物よりあらたうゝゝさ
ひやうにかひあるうかもてうゝして　さゝやうに
中ねのあうれちいさうれとをうり
をゝゝゝゝのくたゝをかゝれうゝるとうとかゝゝあり
髮ちゝゝもとあるちゝさうとうり
ゝれるれきゝをたるを若ひあるゝゝる所　いゝゝゝ英
たるゝゝれゝひゝ所あう稜や
ゝりんさゝゝゝろひゝ
いゝゝゝよあゝゝろよゝゝるとうれゝゝゝゝゝゝあり
ゝあゝゝゝゝゝゝ

名ゐつとなんのうきしよあるさんえるくやをうり
引参紙中断見
さるもこ我くハうるへ乃ほよ彩たしめうをしあつひハ三るへしやハ
又八雲抄ほよ祇社のおよ砥よへうるあうとうるへのほく
ひうり書あるへうるうるうとるとうくうるれ伝ゐうよ乃くうれ
あるへうさうしとうるうにみ第れ井うれて業めうく
三うるうこやうこあるて祝りハ砥ゐうよあうをたうり社ほ
とりうるやや
河海ニ程こ有ゐく略之
河海云
ひうるへの社乃事ひんをううゐ伝り或を変業一社よ
ううゐうこ或ハ又餘社うるとしあるとうこ八雲抄ゐうを社
ひうよあるゐうとうこあるし伝吾社を合よ社ひ乃を法
神祇伯源云
月新八ひうこひうしを祇場やうるへのほよはうゐうまて

利元後成ひうるへのゐうとうるのハ源氏物語よ賀茂の
祭乃日ひ事に ひうを我ハうるへ乃ほよ乃くうさあるを
うゐ伝ゐうるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうひ
伝ゐうをひうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる

[illegible]

又

行ゑもしらぬ人の跡をたづねてかの神ようら葉
とゝひらんれしみてらしたやしたゝとしてうたゝめる
神うもて元へかゝるとうさかうるへよをまうるとうたん
ひさうと　池中物語に影照源氏ものうり後撰々のやさ
きてるる源氏月さらん奇ものうるやゝ神社のうるへ
のゆとうり影物々流うと影照云ものとハ神社
り題をうるうるるやそれ題とうりへと云
元神ゆうるとうるのゆ風宣あを神人のにり
よりとうつるやしりさとみうとりを神のつさ
てゆとゆるゆゆやうきゆうるへのゆとうりを氏題の

此ゆ神のうるうるゆ神ゆうるてのうるきしたれて
とれたりゝへあゝうるゝんやゝあつうさとうるまゝとゝ
も同四やゝ又奇ゆとうるうるてをうるうるやゝゆのうを
ゆゆうゝ我ゝ万葉ゆ神後板をるすれとうゝ寄を
古今ゝ云
神さひうゆるゝゆゆるあさゆれゝうるうるゝ題とゆ
ゆうるとのゆうるゝゆるゆるれ事や　天ゆれゝを
奥義抄云神社ゆ題をうるうるゝゆうるゝたうゆゆとゆれる
ゆゆたうゆゆ神ゆうるゝゆるゝゆゆゆゆゆゆゆゆ社ゆうるゝゆ
ありやうゝむゆる云　清輔説ゆ人ゆゆとを社ゆゆ神
ゆうるゝて題ゆうるゆうるゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆハ源ゆうるゝうるれゆ神社ゆうるゝゆ人ゆうゝを
　　宣長説ゆ
古今三の人ゆゆゆゆゆゆゆゆれゝうゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とうもを而あやまち
ちとひとりとたちうを行はされをぬるうさたり
中将君斗とを行と源氏ろうをひとりたるぬ
まうしよとも
さうをれをいとくたりあうろうはゆるれをのまるはる
さうしをに　文永の時ふすりの月すりはるも
十よ日ろ月をれやたんしいくあるををめうしさんん
将ろ君はまうをうしろうむはる
むへし　弾正　十四日あまりの月はをよ
十日あまりの月はをも
花橘の月新りいとををんやうんあるうるもとをひろ者
ちうつうをれを　さうるとをんある
心をや　さうるとをんある
ちうをあるををるを色とやうんとまるうはるをんをうを立

うるひとをろまうをさ
月夜は橘をあるをんを花橘の月はるをあるをやる色をあるも
はるをろよはるり郭をるもまうる心をとをろ
をあやあくあくおくるくしうあるるありをひくさ
をうくはるをとをろをあるをまをうをあるをるを四るを
るに　月をやをにさをみる橘はるはるをも村をを
立出るをとあやあをたるとも
まうをとうをるをあるををるをうをを
はるるをはるうをあや　歌々殘灯窓壁新蕭々晴雨打
窓色　白氏集
いををうあるをりをとをあるををはるををはるをを　ウ者定
刀者
独してをくをうあるき時る塩ほりをとをあるををや
源氏ろはを色と郭をるはをとをうをををるをるを

たさとの海や　光源氏　きりぎす

あきくれはあつまの方に思ひをやる

行くへはいかにあるらむやとて　平忠度　門前の百人首の歌

紫式部　ふるさとの人の音もなくあれはてて

ひとりもとまる秋の草むら

しくれてはいかにもとまる

らむとて　源氏の夕雲雀の絵詞

如意寺にて物ちとく事をいとはしと

おもふ心ちとなりてとまる

たはるるひとの絵詞

きくにつけてもいとはしきかな

ふるさとのことなりける絵詞

たのもしかりしかたらひ

ふくかぜにまつ事なくしまさはれこそひとりはかなくもと

はのうへにかりはかりの新さんにまとうまつ

ものとふの新さんとたはるひはのうへにかりはかりの新さん

まして源氏はいかはかりも

ものもやうくちらうはかり

一関ふりぬるかな

ふるやうみるとてあるもとりはくへし

紫式部　ひとの行くすえをいかやうにとくやさきを行りんとくやれ

源氏人物ト称セ

行末ハ如何ナルベキ事ニカ　行末ハ

いかゝ成ベキ事ニカ

ウレシクモ

ウレシクモ

ウレシクモ

くゝ雪れ河や

そまいハうとゝあゝゝていのちなすよゝくゝしさやゝもるこ

とゝ大ゝくゝとゝくゝあゝゝ雪ゝ源こうゝゝの口打ゝさんこゝそ

源氏の河や紫ゝいゝゝあゝゝゝ雪ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

源氏りゝそひ給人くゝみゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝ中宮ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝれなすれの口打ゝさゝとのんや

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

私　さもしくもを月ちくに丸雪たる引ゑのやゑの月
ゆひらるものこゝろ結ゆとゆつるゝもりゆれのこゝやゑとゆつん
ゆつゆをひゑゆ事ゆ後ゆ　年七月
はまをくゝとゑかなれゆゆゆゆゆゆ皆をゆとゆまゆゆき出ゆ色ゆ
源氏　源氏のつまをくゝとゑゆれゆゆゆゆゆ弱ゆ月ゆゆ
ゆゆゆくゝとゆゆゆゆゆゆ

とんさんの嘉ひとしきりくさのやうにとゆりあるを
たくさんにハひて行く
（いろはにかきくけこ）
至嘉とあり一たとゆるうしに外をくうあると
織女のひかりを雲のうしに外をくあるの庵とり嘉てあふ
源氏　幼き七夕のあつとくさ事ハ変の如く嘉たる事ハ変の庵よりこれんや
あの庵とを生とうあるく変のこと
風の吉さくあるくもの旅行くうしもはまれいとあり
あくはつくちこうをまうくうをうり
（ひらがな）
村の行ねたくうれ絶たくあくね変の庵とうる
とまてるに吉る時日とも物思ひとてあくく
うり行
（ひらがな）
人の分とあくうり物と今とたくあるとたくあるあるてたくる

市四日ちくうくもれくくくれつとあるてうれまんそくくみ
とくあるをくやうをさせ行ふ事ハのうるの庵わくなひり内
てくの事くもくる中ねの元れ嘉り　一周ハの正月や
八月十四日あやはくくちはくくるとハ月朔日やくくとあると
を精をもるるや也　（いろはにかきくけこ）正月十九日とうれ但ハ
を月ハやくくれ日れうや　齊　斎食やく
元まくの源をくくくとをよ物とくるとハ何のくくくくくん
中侍元　はくくくとくるる中ねう源くくくあるくくくと
くくくくハ何くくくくくく

源氏五　さてとしひさしくなりぬれば
わかぎみのことを同若しかたる事也
やうやうおとなびたまへば　中将の事に源氏のうへ行ける也
九月よりて九日わかぎみのひさしき事を清涼殿
事也　比叡の寺　御
まうでにおはしまして菊花の宴をひらかせたまふに源氏
源氏　ひとりあしくなりたまへる也
源氏とうちつけたまへる也
同海云奥へ
わかぎみとおはしまして菊花の宴ハうるはしきこと
同海云撰長傷ア
もうでにわかぎみ　御の宴ハうるはしくこと
神云月ハたうとしと時雨のうちちらしたるゆふ
ぎりのうちにもうでたまへるこそさまことなりしかと
ひとりとしわかくなりたまへるこそ
しるくまさりたまへる
月ハうるはしき
神云月ハうとし時雨ハかりしとかく神なりうるはしきこと
たうとうのつまはうしろ受てにはかにこゑ
源氏ハ　まかりとハ御みくるまにのりたまへ
るまことにうつくしきと方士とうつくしきとい
ふやまさまかりうしにはさうとくとい
出家よりうしを初ひたるんや　ありやさて其の初り
乃の趣をうしやうしくまさりたるとうつる初とそ
とう者ハ初なれくまかりうしはなりとひくしやう
きとハの行や乃の初うとひくうハ出家也
海云
まはうしやうを幻術うるも仏術ハたとまかりうしとうつる仏
其乃心を蜀の方士ハ楊貴妃ハ有ひたうしるも方

士八郎士の地方の地頭とうしゆまつりごとをつかさどる彼の
士の殿方をとさためて奉事雷電のごとくせうるん
元　むそうこん　有徳と方士より仕をうやうと
あにしたしをあもまうら抜もてのこ月日よ老つく物さ
るあをちちるとふひく世中そそたうとたすく今あつをあろ
ろうたるとのくえたちるるこハ廣上しるく　十八月辰の
日林ふ中ふくわるるも
あて来り行つうあれしはとふくあるるとうりくしき
抜ちるり　夕方北ゆる亜源氏へ参行也
ゆるちちるとの中将殿人つあ抜ちるとゆ氏をとうる
とるとるをにめもくあうれうち使こさるてうつき
はくあるるとるに来り行ふとるとあをちうさ使をとう行り
夕方北ゆる亜乃あるる氏ゆあ人を伯父や和泉や外乃の

を抜るれたも　とるこさん　小長谷のるるも
長橋と八ふ長谷乃欲とふ蓋みく抜付らるとうり紙を
長橋のふ長谷をあ人乃ゆ長乃事をうり
十二月中氏卯日彩賞舎辰日を四節舎みて山蓋よ
てるを長ふ長とうを絶とうれるも一代一度乃天賞舎
あをふくのるるるるる
ふあしをわやしるるるしるるをのわりさをうにおりしてよ
るるへし　晩ゆ乃ふ言うるるをを式ゆの五言乃わりよるるる人
人と中ふ使しあふゆ行るも仕るさよ遷の時新宮よ
つをふ言のるるしわ源氏へ長作しへ人るとれ事さを
ふにわ月しるるゆも日蔭とハ言をとうるるのやしにもるると
るうゆ抜ふ一とり日蔭乃るるしゆを乃ふりあをれるるしにふるを
ふるとゆをひるくゆるるを乃るうゆ中ゆ言ふ舎りふ言舎作

ハいつるるもの　白海云　し女おもとに若はめとまるとしてとあれ
もとくさ宮ゝ事　紫式部云　紫式部るるもの
又言葉女るもを面り書つまる　翠ちゝ云　美思特行へとしも
さもとくに行ゆ山ゆ事　ゆ
宮人ハさゝのあるとゝ山をくさ
源氏　さゝの言葉八十二月辰の日のゝ前りほく
言心ハ　宮人なとを書きつて禁中へつくを
海とも思ハ言ゝ行ってゝ　ゝのゝ日新とゝ
てとハ日蔭ゝゝとつゝ　ゝ代言ゝあ思ハゝれ
よもて月日のゝを源氏のゝ上あゝとゝれたゝゝゝ
ゝとゝ山くゝ海思ひをくゝ　源氏のゝ
さ年もやゝくゝゝゝゝあゝとも
今ゝと思とゝゝと行ゝ行ゝ前ゝゝゝゝ

きなるゝとつゝきをゝやゝくゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源氏　紫上のもとに山ちかき所にて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ばかりとのそらしほくるるや

うちつめて乃ちをうひるもの雲の煙うばたまの

源氏　ゑをかぞとはいふのことをうりきこつめてとはうき

ほつめてやりしかまれ縁りのつり同雲升の煙とも

ばかりの煙のうくくびくとも煙りのさんとも

と書付きくみかやきをりの中仏のうちをくくうるとをくくを

をとはほきくあやはしまうをとくとく　禁中のくくこの

仏のうちを唱るのやをきまををと同ゑとをうとこの所の行

事やこのり枝りあるを河ハ楊枝ばを頭ばくくうるや

室龍の年始をうと　見官東事録

或天也七年十二月始有仏名

又来和五年十二月十九日始之　舘の四

夏観接云本改大臣乃対三無行仏名懺悔事ノ

楊枝乃色くくるとをりはかはさ　源氏つのあを仏のを唱

ハ楊枝を頭ばくくうるやをくくを

ゆくををたくををるのを為行のををくくを事くくくくくを

くくを言くくくくるくて

る枝乃果を行くくを出をくくを仏のをくくを事くくくくを

仏のを寺所　源氏のをくくを

をの結をくくをくくくくくを出をくくをくくを仏のを

まあやうにはをるとにくくを　仏をくくを結くくを

寺所のまくくるを清ゑりをを　雷れをとのをりはをるくを

くくくくををくくくくく

近府ちかく勧盃のまゐるやうに
なりてもとなりの年はかんしくにまゐりあはせまゐらせ
あまたなりてまゐれたるはかりなし　浄蓮寺所於禁中
仏名の導師の時三礼のうちに簾中よりの夜と給事
ありしかや例也　寛喜十九年仏名導師　雲居僧正　賜法
阿古女　天暦四年　仏名導師　浄蓮寺　三礼之間自簾中
給法衣之
うしろをやりくくとあらうとて中つかさ
導師の髪をつかうまつりて　仏名　三礼ごとに
いつものあまをしめ　いつるや
年のくれにはかうの髪をかきなをしたるとかつて
まいりのあまをとりあはせ　梅もつかうまつる
くしきたりとこうめて　行くしきたりとひちりとをありぬべき

まとたかはしきとくしまうてをき
あとはかりにあるとも
物のきをひもとけぬへき四ちう　行へて
まうとあくしまうてを　法師
をきをてぬんや
はかりまうたるものうちをんしるとまうせさせ給ふ
ちとおとをの法曲ををんしまうとや　ひさくう酒宴をと
乃ちしまう
まうくやをうれさうつきうはつうくに　例の出家式やう　法
ありをやうにくつうとのんや
まうこれ命をしをを雪中にをうりく梅をとうかをうん
源氏　ひあり　行りんとのひりふまうこの命ををうり給
八年　内の宴　梅をとうくしまうとや

常に参り給ふ女房上達部
あとにはかりにあるとも　宗と慈傷ゆへ　去年
をきをてぬんや　法師　例の出家式やう　法

三条右大臣集巻第十九　建保六年十二月十九日内乃仏の御寺
師のもとに玄賢法師うゑ侍りける　仏の御寺
けるにかりに出さしてゆかりなくて侍りしを　賀してはるかに
きこえ侍りしを　玄賢法師
玄乃中に山乃蕨は雪ぬ時なくさかりたりけるを　所
所衆
ぬしなくしてまたるやまとうん山の白雲
貫之集仏の御寺うゑ侍りしに　寺師
雪梅とよみてあるを法師おくことにはりたりたるを
はりの雪のうへにうゑたる梅とあるを
梅はなれはりしまくに八月に東乃山法の君はなりかはりぬ
法師
玄乃春乃人さかりとはりとをきて我乃をとをしたりぬる
寺師　年に累これは玄源氏とむとはんきとんといふる

さきにこの寺師を君とこそ分れはりたりける
人くはりはくこゝろをよせたりしとこそ　制乃武部乃
亀法師

花の日をいとはるる法師のこゝろをしたりけるこゝろ
ゆくすゑをかねてをしはかりけるこゝろ
傳八　伝乃日源氏はなしてあむらくへ出給とのみや
年ぬ　源氏の内にもあ稲へ出給しやうちにのこゝろを
内給しうるを日我とうけりとこゝ
あはのうへにあるこゝをこゝめはりあるとこゝ君ぬとはりとも
はちちきたるよはりとこゝ源乃こゝろるるをとゝり
人はりをきに　源氏乃内
内の衣のあるやうんとこゝたりる所へこゝるのはるこゝをせんとん
しるとあるこゝをはりをおりて　長徳乃るや

[illegible]

[illegible]

[illegible]